

徳川と林家と木更津と兎と



猷兎乃記念碑

八坂神社 木更津市上根岸171

松平家(後の徳川家)の祖である松平有親・親氏父子が永享の乱に敗れ、諸国を流浪している際、信濃国林郷(現在の長野県松本市)で、旧知の武士である林光政(林家の祖)が彼らを匿まったといいます。そして、自身も食に窮する中、光政は雪中に兎を捕らえて有親・親氏父子に振る舞いました。

家康はこの先祖に対する恩に感謝し、毎年正月には林家が将軍に兎の吸い物を献上し、将軍から新年一番の酒を賜うという「猷兎賜盃」を徳川幕府として儀式化しました。途中、中絶はありましたが、「猷兎賜盃」は幕末まで廃されることなく続けられました。



木更津市の上根岸には、その歴史を物語る「猷兎乃記念碑」があります



木更津 請西藩 譜代大名林家について

林家は徳川家直参の旗本で、14代忠英が先代までの知行3千石に7千石を加え1万石を領しました。文政10(1827)年貝渚村に陣屋が設けられたのち15代忠旭により貝渚村から請西村へ陣屋を移しました。

請西藩の注目のひとつに、幕末の動乱期に藩主自ら脱藩し、戊辰戦争に参加して新政府軍と戦った結果、明治維新において全国で唯一取り潰しになったことです。この処分によって失われた家格の再興には、20年以上の年月がかかりました。その後、林家は華族となり、当主忠一は最後の貴族院議員を務めました。



第3代藩主 林忠崇 (はやしたたか)

真武根陣屋跡

木更津市請西1139-33

(上総国請西藩藩主 林家 1850年~1868年)

真武根陣屋は嘉永3(1850)年に築かれた請西藩の陣屋で、近世の木更津港から約2km南東に入った標高約50mの台地上に築られました。請西藩の陣屋はもとは1.5km北西の貝渚にありましたが、林忠旭(ただあきら)が藩主のときに「間舟台」に移し、「真武根陣屋」と呼ばれました。

安政元(1854)年、忠旭は弟の忠交(ただかた)に家督を譲りましたが、忠交は慶応3(1867)年に没したため、忠旭の子、忠崇(ただたか)が藩主となりました。

林忠崇は、戊辰戦争の折、藩主でありながら自ら脱藩し、陣屋に火を放ち、旧幕府遊撃隊の要請に応じ出陣しました。出陣後、各地を転戦しますが、最後は仙台藩の説得に応じ降伏。請西藩の領地は没収され、藩は消滅し、陣屋も廃されました。その後、長寿を全うした忠崇は、昭和16(1941)年まで生き、「最後の大名」の異名をとりました。

